

公立看護大学における学生FD活動の展望

吾郷美奈恵・藤田小矢香・長島 玲子・井上 千晶
岡安 誠子・伊藤 奈美・小田美紀子

概 要

A公立大学看護学部の学生FDメンバー11名に「学生に求められるFD活動」をテーマにラベルの自主提出を求めた。そのラベルを基に「学生とともに進めるFD活動とは」をテーマに類似性に従って分類・命名し、図解した。

提出されたラベルは57枚で、21のカテゴリに整理できた。カテゴリおよびカテゴリの関連性から導きだされた図解のイメージは波紋で、「楽しく活動することで、大学を好きになり、学びやすく・働きやすい環境を創ること！」が導き出された。また、カテゴリは内容・方法や意図が交錯し、密接に関わり合っていた。今後は、明らかとなったFD活動を教職員が学生とともに取り組み続けることが重要である。

キーワード：学生FD, 看護大学, 学生主体

I. はじめに

日本のFD (Faculty Development) の展開には文部科学省による政策が大きな牽引力を發揮してきた。大学設置基準の改正によりFDは制度化され、1999年：FDの努力義務化、2007年：大学院課程におけるFDの義務化、2008年：学士課程におけるFDの義務化、となった(山田, 2010)。全ての大学で組織的な実効性のあるFDの強化が課題となり、学生参加型FDに取り組む大学が徐々に増えてきた(服部, 2012)。

FDは授業の改善が第一目的であるが、学生をFDの受益者ではなく主体者と考え、一緒に授業の改善を考える取り組みが学生とともに進めるFD(以下、「学生FD」とする)へと推進

してきた(木野, 2012)。また、「学生FD」の取組は、2009年から始まった全国の学生FD交流会である学生FDサミットによって急速に各大学に広がり、これまでに日本の大学の1割を超える80大学で行われている(木野, 2015)。

“学生FD”とは、「授業や教育に関心を持つ学生が、その改善のために学生自身が主体的に取り組む活動であり、大学側との連携を求めるもの」である(木野, 2015)。一方、学生FDとして取り上げられている活動内容は多岐に渡り、かつアクティブ・ラーニングやピア・サポート・プログラムなど多様な要素を含んでいるとの指摘もある(沖, 2013)。

A公立大学看護学部は、2014年度から“学生FD”の取り組みを始めた(山下, 2015)。全学生を対象に公募し、自主的に希望した者を学生FDメンバーとしている。また、活動内容を問うのではなく、大学のFDに学生の視点を反映する取り組みとして、学生が主体的に教育や授業について考えることをねらいとしている。ま

この研究は、島根県立大学出雲キャンパスにおける平成26年度特別研究費の助成(代表：吾郷美奈恵)を受けて実施したものである。

た、学生の視点から大学を改革する動きを教・職・学の三位一体で推進することで、学生が大学を変えることを自覚し、その力を発揮する風土や体制につながることを期待している。

このA公立大学看護学部の“学生FD”の初代メンバーは、2014年8月23日・24日に京都産業大学で開催された“学生FDサミット2014夏”に参加し(京都産業大学学生FDスタッフ「AC燦(ASN)」, 2014), 他大学の学生と交流し学生FD活動に関する情報を収集した。このサミットでは「共創」「笑顔」「学生主体」という3つのコンセプトのもとに、ポスターセッション、しゃべり場、分科会等が実施された。「しゃべり場」とは、6～8名のグループに分かれてアイスブレイクから所定のテーマをめぐって話し合いを行うものである。参加者間の交流と話し合いであるが、学生FDサミットでは標準的な形式となっている(木野, 2015)。

今回は、ここで得られた学生の学びを基に、学生とともに進めるFD活動の内容・方法やその意義について明らかにすることを目的とする。

II. 方法

対象は、A公立大学看護学部の学生FDメンバー11名(3年生3名, 2年生4名, 1年生4名)が自主提出したラベルである。ラベルは、“学生FDサミット2014夏”の参加を通じて学んだことから「学生に求められるFD活動」をテーマに一義一文で、各自5枚の提出を求めた。

分析は、研究者7名が「学生とともに進めるFD活動とは」をテーマに類似性に従って分類し、カテゴリとして命名し、図解した。

図解した結果は、ラベルを自主提出した学生らに確認を求め、信頼性・妥当性を確認した。

III. 倫理的配慮

協力の有・無により利益・不利益を被ることはなく、自主提出したラベルの管理は研究代表者が鍵のかかる書庫で行い、研究終了後5年間保管し、適切な方法で消去する。また、分析に用いるラベルは文書作成ソフトウェアで作成し、個人が特定されないように配慮し、公表の

際にも個人を特定することはない。以上のことを文書と口頭で説明し、自由意思による協力を求めた。

なお、本研究は島根県立大学出雲キャンパス研究倫理審査委員会の承認を得ている(承認番号129)。

IV. 結果

提出されたラベルは57枚で、21[カテゴリ]に整理できた(図)。これらのカテゴリから学生に求められるFD活動とは『楽しく活動することで、大学を好きになり、学びやすく・働きやすい環境を創ること!』が導き出された。

カテゴリおよびカテゴリの関連性から導きだされた図解のイメージは波紋で、[楽しく活動する]をきっかけに[学生FDの知名度を高める][活動に目的を持たせモチベーションを維持する][学生FDの繋がりを強化する][看護系大学にあった活動を目指す]といった活動の目標が見出された。具体的な学生FDとしての活動は[[しゃべり場]を設ける]ことで[学生FDが教職員と学生の橋渡しをする][学生のヨコの繋がりを強化する][学生のタテの繋がりを強化する][実行力のある学生リーダーを醸成する]ことを推進しようと考えていた。また、[学生が授業アンケートを行う][学生と教員でシラバスを作成する][SNSを活用した情報交流の場を設ける][学生による授業参観を行う][学生による大学案内を作成する]ことで学生FD活動によって[学生が学生生活をサポートする仕組みをつくる]ことを目指したいと考えていた。この活動により[大学組織の活動に協働する][大学を盛り上げる活動をする][地域との繋がりを強化する]こととなり、これらの活動を展開することで[大学を好きになる][学びやすく・働きやすい環境を創る]といった学生FD活動の目標を導き出していた。

V. 考察

“学生FD”は日本独自の取り組みで、ヨーロッパ型の学生参画とは異なり、学生の意見を「改善に活かす」ことが目的で、教育の「質保証」

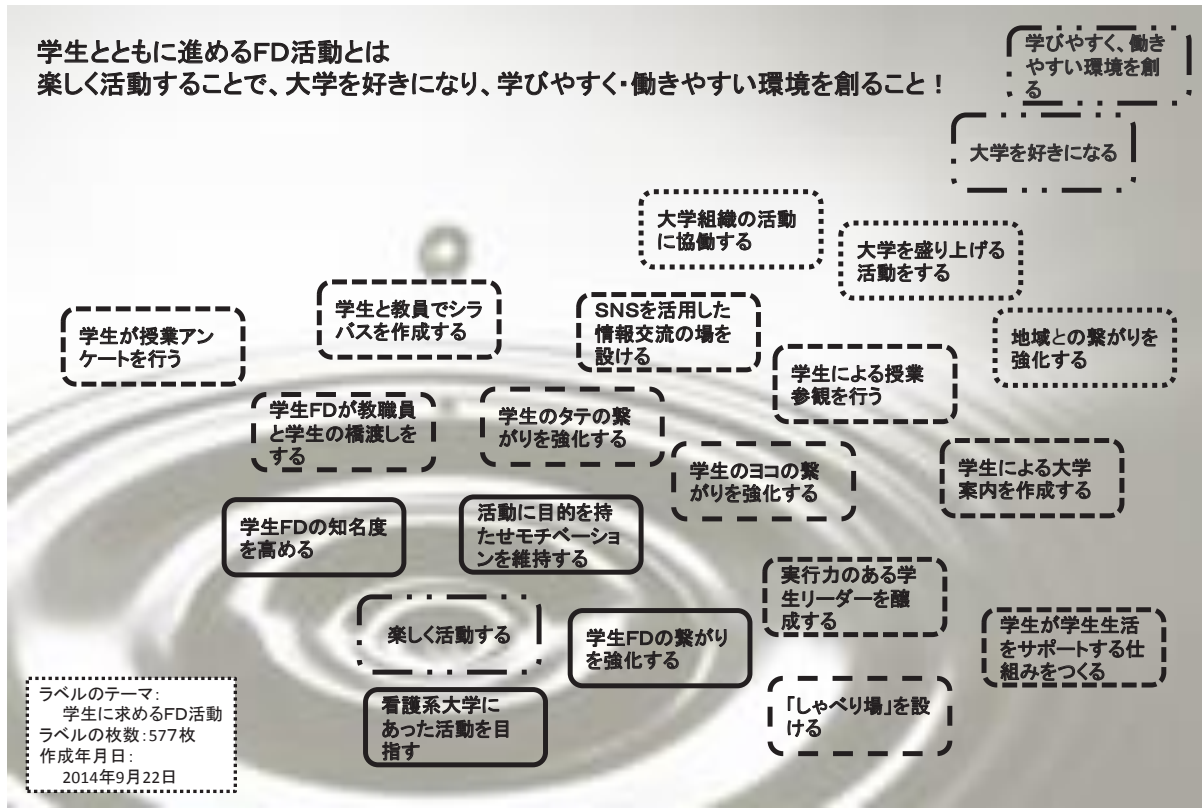


図 A公立看護大学における学生とともに進めるFD活動

活動にまで学生を加えているわけではない(木野, 2015)。また、日本ではFDを実行する責任も権限もあくまで教職員であり、学生の視点をFDに活かしたいと思う教職員の応援団と考えている。

今回の結果から、A公立大学看護学部におけるFD活動の内容・方法として分類・命名した主なカテゴリからその意義について検討し、次の様に考えられた。学生FDサミットで標準的に行われている[「しゃべり場」を設ける](木野, 2015)といった活動により、授業や教育、学びの環境改善について、学生の声を大学や教職員に伝えることが可能になる。[学生が授業アンケートを行う]、[学生と教員でシラバスを作成する]、[学生による授業参観を行う]ことで、学生の視点を活かして授業をよくすることが可能になる。また、[学生による大学案内を作成する]、履修相談などの[学生が学生生活をサポートする仕組みをつくる]ことで、学生の学びへの意欲を高めることができると考えられる。

一方、A公立大学看護学部のカリキュラムポリシーの一つに「地域の特性と健康課題を探究する能力の育成」があり、[地域との繋がりを

強化する]ことはA公立大学看護学部の特徴とも考えられる。学生らは、地域の中で学ぶことの意味を感じ取っていることの現れと思われる、[看護系大学にあった活動を目指す]にもつながるものと推察できる。また、[学生FDが教職員と学生の橋渡しをする][学生のヨコの繋がりを強化する][学生のタテの繋がりを強化する]から、学年を超えた学生間の連携や教職員との相互性の促進を期待していることも推察される。

学生FDに取り組む大学が増えているが(木野, 2015)、学内での理解や関心が広がりにくい点も指摘されている(服部, 2012)。しかし、今回の結果に[学生FDの知名度を高める]とあり、明らかとなったFD活動を教職員がともに取り組むことが重要である。また、学生FDメンバーの確保には、募集に応募してきた学生を迎える応募制と学部に出すべき枠を割り当てる指定制がある(服部, 2012)。A公立大学看護学部の学生FDメンバーは自主的に申し出た学生(応募制)である。“学生FD”は、学部・学科等の専門性を活かした活動も多く、看護学部を単位とした活動にも適していると考えられて

いる(木野, 2015)。“学生FD”は学生を欠いては成り立たず, 組織的な不安定さはある。しかし, “学生FD”は学生の主体性が基本と考え, 今後も応募制でこの活動をサポートする大学組織を維持することが今後の課題と考えられる。

Ⅵ. おわりに

学生とともに進めるFD活動のカテゴリは内容・方法や意図が交錯し, 密接に関わり合っていた。今後は, 明らかとなったFD活動を教職員が学生とともに取り組み続けることが重要である。

文 献

- 服部憲児(2012): 学生参画型FDの現状と実践上の課題, 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 38, 197-214.
- 木野茂(2012): 大学を変える, 学生が変わる(初版), 3-102, ナカニシヤ出版, 京都.
- 木野茂(2015): 学生, 大学教育を問う, 1-14, ナカニシヤ出版, 京都.
- 木野茂(2015): 学生, 大学教育を問う, 217-230, ナカニシヤ出版, 京都.
- 京都産業大学学生FDスタッフ「AC燦(ASN)」(2014): 学生FDサミット2014夏—あなたがキズク未来—, 2015-09-03, <http://www.kyoto-su.ac.jp/outline/approach/excellence/kyouiku/summit/>
- 沖裕貴(2013): 「学生参画型FD(学生FD活動)」の概念整理について—「学生FDスタッフ」を正しく理解するために—, 中部大学教育研究, 13, 9-19.
- 山田剛史(2010): 大学教育センターからみたFD組織化の動向と課題, 国立教育政策研究所紀要, 139, 21-35.
- 山下一也, 吾郷美奈恵(2015): 看護学教育における大学マネジメントと学生FD, 2014年度第20回FDフォーラム報告集, 111-117, 大学コンソーシアム京都, 京都.

Perspectives on student FD activity in the public nursing college

Minae AGO, Sayaka FUJITA, Reiko NAGASHIMA, Chiaki INOUE,
Masako OKAYASU, Nami ITO and Mikiko ODA

Key Words and Phrases : Student-Initiated Faculty Development,
Nursing College, Student Initiative

吾郷美奈恵・藤田小矢香・長島玲子・井上千晶・岡安誠子・伊藤奈美・小田美紀子